



Title	故父吉田北山について
Author(s)	吉田, 晉
Citation	懷徳. 1975, 45, p. 23-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

故父吉田北山について

吉 田 晋

一、まえがき

過日懷德堂々友會委員中川幸三氏より、故父北山吉田銳雄のことに關し生前の思い出を書いてほしいとの依頼があった。時を同じくして石濱純太郎先生が會誌「懷德」の第四十四號に吉田北山先生と題して想い出の一文を草され、非常におほめの言葉を賜わり恐縮している。

中川幸三氏には小生幼時より何かにつけ大變お世話になり可愛がってもらったものである。昔日よく拙宅にお見えになり、まだ記憶している方々には藤塚誠二氏、酒井全太郎氏、山本樽信氏らがある。皆さんが御壯健にお過しになっておられる現在、これから述べる小生の思い出話に誤りがあれば訂正をお願いしたい。

私は滿三歳頃より故父の家に引きとられ、正式には昭和二年一月に入籍され養嗣子となった。従つて幼時より故父の許にあって、いろいろな事を學び、どうしても漢

學者としての後繼ぎの許可が得られないまま化學工業の道に進み今日に至った次第である。

思い出話は多々あるようであるが、いざとなると通常の家庭と何ら變らない日々の生活であつたので、これという特別の事柄もないようである。ただ明治の香りのする一儒學者の家といった感想に盡きるといえよう。

いろいろな記録や古手紙や北山叢書などが手許に残っているものの、整理や手入れが行届かず、皆様に申譯ない事と反省している。かつての（中國より購入した漢籍が大部分であるが）藏書のはほとんどは木村英一先生と藤塚誠二氏の御好意により、中川幸三が目録を作られて大阪大學文學部（豊中市待兼山町）に引き取っていただき、西村天囚先生の藏書などと共に保存されている。

とにかく故父は重建懷德堂の開講の當初より戦災後閉講近くまで懷德堂と共に生きて來た人間である。以下思ひ出すまま故父吉田北山の横顔の一端を御紹介すること

にした。

二、出生より病歿

吉田家は清和源氏の流れを汲む士族で、攝津國安威村（茨木市）の出身である。元來乾姓を名乗っていたが故父の四代前の三子のうち一人が京都府天田郡福知山市に移り、吉田姓を名のり、祖父に當る和助の二男銳郎が分家して大阪に住みつくようになった。銳雄はその長男として大阪市北區紅梅町九十四番地で明治十二年九月二十一日に生まれた。母はさとといい、明治十五年五月に病歿している。明治十九年五月に繼母林たしが迎えられ、異母弟土岐朗、妹てつ、の三兄弟妹で育った。實母さとは銳雄の他に子供は生れているが皆乳兒期に他界している。

故父は明治三十三年三月に大阪府立第一中學校を卒業し、同年四月から約一年間東成郡鯉江小學校の代用教員となり、引續いて大阪盈進高等小學校の代用教員を一年間勤めている。明治三十五年から同三十七年にかけて大阪速記用達社を設立し、一般速記事務並に著述業を営み、明治三十八年一月から同四十五年三月まで大阪朝日新聞社編輯部に勤務した。この後約二年間は肋膜炎のため静養している。これより先、明治二十年四月より同三

十五年五月までの間、市村元貞先生に師事し漢學を修業した。

この朝日新聞入社中、西村天囚先生が同社記者をしておられて、天囚先生を知る機會を得た。懷德堂記念會は明治四十三年に天囚先生らが起し、天囚先生は理事をしておられた。故父は大正三年六月から大阪府立圖書館の書記に就任し、同五年九月十三日に退職して、翌十四日に懷德堂記念會書記に拾いあげられた。懷德堂の重建竣工による開堂式は同年十月十五日に盛大に行なわれ、懷德堂として學問塾の本據が再興確立された。この時以來故父は病歿するまで懷德堂と共に歩むこととなったのである。

この間、大正二年一月には父銳郎が病氣のため他界し、また大正八年六月から同十二年十月まで大阪市立實業學校の囑託教員を、また昭和五年頃から約八年間私立梅花女子専門學校國文科の講師も引受けていた。

懷德堂に勤務してから皆様方の御推舉により、特に東北大學の御援助を得て、大正十二年十一月二十八日大阪を發ち、同十四年六月十二日歸國までの約一年半、文部省在外研究員として當時の支那國北京大學に留學している。

前後するが、明治四十四年四月二十二日上羽まつと

結婚し、同四十五年四月二十九日には大阪府豊能郡池田町北山の口二、二〇五番地に轉居し、本籍もここに移した。この北山の口の北山が故父の號となつたのである。

それまでは字は子興、松茵と號していた。ついで大正七年には池田町小阪前に轉宅し、昭和四年には同町宇保二六九番地に移轉、同九年から晩年を池田市本町三、一八二の一番地で過すようになった。

昭和十五年四月十二日に妻まつが福知山市の病院で敗血症のため病歿し、故父は終戦後同二十三年五月十二日朝自宅で腦溢血で倒れ、満六十九歳の生涯を閉じたのである。

三、性格と生活

體格は非常に骨太の瘦身で、毛深い方であつた。脊丈は一・七五メートルの長身でいくぶん猫脊であり、どちらかといえば頭部は小さい方で淺黒い顔色をし、齒並みは悪く、晩年には割合い整つた口ひげを生していた。鼻と目が大きく、弱い近視に亂視がまじり眼鏡を常用していた。

血液型は典型的なA型であつたと想像される。大叔母の話によれば「かんしよう病みの變屈男」であつたという。氣弱い性格で本を讀んでいる時が一番御機嫌がよか

つた。頑固で氣が短かい反面、毀譽褒貶には恬淡とし、欲のない人で、人にだまされ易いお人好しであつた。

私が故父の家に來たのは大正六年頃で、中學校卒業までの約十四年間を一緒に生活していた。その後は年に數回接する程度で、いろいろな記憶も現在うすれ勝ちであるが、生活態度はいわゆる明治の庶民の生活に武士の意地が交り合つた封建的なものであつた。

故父は毎朝寢床の中で家族の者から肩腰脚に按摩を受けてから起き出すのが日課の始りで、洗面後は先づ佛壇にお茶と線香を供え、短時間ではあるが兩手を合せて念佛を唱え、祖先の靈に額づいた後朝食をとる習しであつた。特に亡き父母に對する尊敬と思慕の念は非常に深く、何をおいても位牌に額づき、生ける人に接するが如く振舞つていたことは東洋哲學の範といつてよいと思う。一月二十九日が亡父銳郎の命日に當るため、毎月二十九日には必ず精進料理を命じ、大廣寺の僧侶を呼び鄭重に供養を續けていた。盆會やお彼岸の祭祀はしきたりに従つて嚴格に行なうことが通例であつた。日常生活は自らもそうであつたが、家人の作法に就いても、躰は非常に厳しかった。私も小學校入學前でさえ大人顔負けの挨拶をさせられていたように思う。

故父は身體はさほど弱いという方ではなかつた。若い

頃患った肋膜炎の他はどことが悪いということとはなかったが、健康には用心していたようである。ただ醫者嫌いは極端で注射などは以っての外の事としていた。若い頃の速記による右手の酷使が原因で、右手から右肩にかけ一種の神経痛を患っていた。従って晩年には筆を持つ手がふるえ字が思うように書けず、かんしゃくを起していることが度々あった。また血壓も高い方であつたらしく、晩年には偏頭痛や首筋の痛み、だるさをよく訴えていた。六十歳を過ぎ、日支事變や大東亞戰爭による中國での戰鬥行為には極端な憎惡をぶつつけ、わが國軍部を非難していた。中國文化の破壊や儒書の焼失逸散を極度に殘念がり、物資不足と相待つて短氣を通り過ぎて氣力も衰え勝ちとなつていた。

漢方藥には目がなく、他人から神経痛によいとか、咳によいとかいってすすめられたものは少々高價でも買求めて使用し、三日坊主で終つて、また違つたものを求めてくる癖があつた。洋藥はほとんど用いることはなく、頭痛どめにノーションを、咳どめに龍角散を常用し、時々胃散をのんでいたようである。また懷爐を用いることが好きで、懷德堂の勤務が夜に涉ることが多かつた爲、冬になれば必ず腹巻の中にしのばせていたものである。

家庭内の父として夫としての威嚴は保つていたが、四

季の行事や祝祭日には簡素ながらも一通りの事はしていた。年末には紅梅町時代の思い出を噛みしめ、にこにこ天満の市場へ正月用品を買ひ出しに出かける半面もあつた。妻まつが病身であつた爲、何かにつけ私が幼い時からお供や助手を勤めさせられ、今様でいう鍛えられたものである。しかし學業については一度も指導してもらつた記憶はない。

懷德堂に出かける折には、いつも講義の資料や本と共に新聞紙に包んだ辨當を風呂敷に包み小脇にかかえて、猫脊の上體を更に曲げてゆつくり歩いていたのが印象に残っている。中國に留學してからは中國語を驅使して多數の中國留學生の世話をしていた。日本語や日本の習慣を教へ、また下宿の紹介などをして留學生から尊敬されていたようである。

敢えて短所といへば、ひとりよがりのあつた點であろう。これは一般的に學者に共通する自信過剰と自己の世界に埋没する結果生まれてくる一種の優越感からくるものである。私が再三苦言を呈したことがあるが、その度に反省はしていたが晩年にはそのような事はなかつた。ただ頑固な性格は死ぬまで治らなかつたようである。

四、嗜好と趣味

故父は酒類は全く嗜まず、煙草は大好物であった。いつも刻み煙草をくゆらし、煙管で灰を叩き落すため、煙草盆の灰入れの縁が壊れたり、火鉢の縁や五徳が傷つくことが多かった。刻み煙草は小袋（三十瓦入り）一包を二、三日で空けていたようである。外出時や來客の時は朝日を喫っていたが、腰にはいわゆる煙草入れをいつも差し込んで持ち歩いていた。

甘い方は大好物で、おはぎに砂糖をまぶして食べるほどで、羊かん、饅頭、最中の類を好み、時には自分で甘味専門の店を開きたいと戯談まじりに話すほどであった。また食事には幼ない頃からの貧困生活が身についているといつて、鹽辛いものが好物で、煉もの、佃煮、鹽昆布、鹽燒きの類を好んで食べていた。肉類や果物は餘り好まず老人向きの食事でなかったことは確である。

趣味は北山の口時代には同好の人々と謠の稽古をしていたことと、寺社を歩き廻って歴史と文化に關する資料を集めていた。小阪前に移ってから池田人物誌の資料集めと原稿書きに他をかえりみる餘裕はなかったようである。本人が卯年生れのため兎の人形類を集めていたことと、佛像や古墳にひかれていろいろ調べていたぐらひ

である。

本町に移ってから同好の士が集まり吳山社を起して月に一回例會を開き、漢詩の作詩を楽しんでいた。他にはこれといつて趣味はなかったようであるが、儒學への道が趣味そのものと一致していたといえよう。人間にとって趣味と職業が一致していることほど幸福なことはないので、故父もその點は認めていたようである。

中國に留學してからは、凡ゆることが支那づき、中國流に物事を處理することを好み、中國に關する事は大小洩らさずメモや切ぬきを樂しみ話の種にしていた。また字體もこの頃から變り習字にも時間をかけていたようである。

五、學問への道

努力家であつたという一語に盡きると思う。學問を修めるのに終着驛はないといわれているが、身を以て實踐していた。暇さえあれば終日でも机の前に正座して、本を讀み、朱注をいれ、抄録し、原稿を書き、トイレの中でも、通勤電車の中でも本を手放さなかつた事は、まさしく學問の蟲であつた。

幼年期より少年期にかけての十五年間、市村先生について漢學修業をしたことは後の故父の人生を決定的なも

のにした事は否めないが、それ以前の小學生までにすでにいろいろな文章を筆で書いて郵便ポストや近所の家に投げ込み、祖父鋭郎からよく叱られていたという。いわば生れ乍らにしてこの道の素質を持っていたものである。このことは祖父鋭郎が文學的な素養を持っていた事にも影響されている。鋭郎は手先が器用な人であったばかりでなく、字も上手であり、講談本を執筆するため資料を多く集めていたので傳記物や歴史や英雄に關する知識は故父の幼時期に興味と感化を與えていたことは確である。また鋭郎は西南の役にも出征した陸軍曹長であったことから、昔流のしつけや學問に關する理解は故父にも大きく影響を及したようである。

長ずるに及び、西村天囚先生らの御指導や御厚情を受けて、漢學の道を更に深く極めるようになり、東洋哲學の研究に没頭し、いわゆる儒學者としての生活を送るようになった。

本の手入れと取扱いは嚴格そのもので、常にうやうやしく掲げ、本を跨ぐとでもすれば途端に叱聲がとんで來たものである。年に一回藏書の蟲干しをした。帙を一々開いて和綴じの本を部屋一杯に擴げて並べ、埃をはらい、純魚を殺して十分陰干しをし、小袋のナフタリンをいれて、また元通りに本棚に収める仕事は大變で、三日

間餘りをかけて實施する習しであった。漢籍や和綴じ書物の本棚として使用していた獨得の二段の本棚は、紅梅町時代祖父鋭郎が押入れの中で行李を整理しておく棚に造っていたものを利用したものである。小阪前時代近所の橋本という大工さんに更に二十個注文して、ニス塗りの特製品を造らし、支那國より購入した大量の帙入り漢籍の整理に大いに役立たせていた。

儒學を學んでいた内容については残念ながら門外漢である私には不詳である。しかしその學ぶ姿勢のきびしさと努力は大いに見習うべき點が多く、専門を異にしている私にとつても一脈通ずるものがあつた事を痛感している。

故父の儒學研鑽に關する業績の一端は北山叢書として大切に保存し、歿後も手放さず子々孫々に傳えるようよく話していたので、現在私の手許に保管している。しかし猫に小判のそしりをまぬがれないので、いづれ何らかの保存方法を考えなければならないと思つてゐる。

六、おわりに

故父の横顔と思ひ出話を想ひ出すまま記してみたが、まだまだ大小いろいろなことがあつた。しかしいづゆる學校の先生並みの平々凡々の貧乏家庭であつたことは事

實で、今家をついでいる私の手許には有形の資産財寶に類するものは何一つ残されていない。全く子孫の爲に美田を買はずの實行版であり、死して名を残すまでに至らないもの的大阪市や池田市にとっては些か文化的には貢獻した明治男の一人であったと思う。

病歿の時期が戦後の荒廢期より漸く脱しかけた昭和二十三年であり、私も膝元を離れ長く九州で勤務していた爲、墓所も求めることが出來ず、病身の弟土岐朗（小生の實父）が祖父銳郎の墓に共同納骨してしまった。亡妻まつも同所に眠っており、この墓は福知山市の堀町の墓地にあつて吉田銳郎の墓碑ではあるが、いわば吉田家の墓となつてしまつてゐる。池田を愛し、池田で三十有八年の儒學者生活を送つた事を考え、池田市に改葬することを私は志しているものの、遺憾ながら未だその機を得ず今日に至つてゐる。

現在懷德堂のあつた所はビルに變容してしまつてゐるが、いづれ場所を代えても有志により再興され、浪華の精神文化の中心殿堂として、傳統ある眞の日本人育成の場が實現されることを願つてやまない。故北山も時代の變遷は十分豫測していたものの、わが國の長い歴史と傳統文化の觀點から繼承者の必ず現われることを願つてゐた。

目下私は儒學とは凡そ縁の遠い職業について四十年餘り、また故父の孫に當る私の子らもこの道を承け繼いでおらず汗顔の至りであると同時に、時代の移り替りを強く感ずる次第である。

ここに故父の横顔の一端を披露し、懷德堂々友會々員各位に吉田北山の人間像を御紹介申し上げた次第である。なお御質問御問合せ事項がありましたら左記へ御連絡願えれば幸甚です。

〒241 横濱市旭區今宿町二二九九ノ九七

吉 田 晉

電話 ○四五―三六二―一八〇九番

（昭和五十年一月七日記）